実践研究論文

希望と勇気を育む道徳科の指導と評価について
～児童生徒の意識調査を活用した事例研究～

江戸川区教育委員会　坂口　幸恵

【要旨】

コロナ禍は世界中の人々に未曽有の影響を及ぼした。教育現場では３か月もの突然の休校となった。こうした逆境に負けない強い心としてのレジリエンスを児童生徒に育て、将来に向けて希望や勇気を育むことが喫緊の課題である。

このような時期に「希望と勇気を育む道徳科の指導と評価について」研究することは意義深いことである。そこで、道徳科の指導法では、「ヘレンとともに～アニー・サリバン～」を教材として活用し、児童生徒の自尊感情に関わる意識調査を踏まえた発問構想を立て、共同体感覚とケアリングの視点を取り入れた授業展開を実施した。評価法としては、児童生徒の発言や記述を分析するとともに、一人一人に面接を行い、個に応じた認め、励ます個人内評価を実践した。

先の見えない不透明な時代にあって、道徳科の指導を通して児童生徒にレジリエンスを育み将来に向けて希望と勇気をもってたくましく生き抜く力を育てることが肝要である。

キーワード：希望と勇気、共同体感覚(自己重要、他者信頼、他者貢献)、ケアリング、レジリエンス

１　問題の所在と研究の目的

２０２０年前半は、コロナ禍のため世界中が未曽有の影響を被った。日本の教育現場では、３月から５月が休校となり、児童生徒は心身ともに大きな影響を受けた。突然起きた予測が難しい状況の中で、子供たちは戸惑い、不安定な日々を送った。区の方針を受け各学校では、週ごとの家庭学習時間割をホームページで発信するとともに、毎週担任が個別に電話連絡を行った。子供たちの声には、「朝、登校し、友達と遊んだり、勉強したりするのができずに不安だ。」「学校に行くという、当たり前のことができなくてイライラする。」などが多く寄せられた。当たり前と思っていた日常の学校生活が、実は当たり前でなかったということを痛感した３か月でもあった。

６月１日の読売新聞記事[1]からは、休校期間中３か月の若者の感情の推移が見て取れる。この調査は、読売新聞社とＮＴＴデータがこの間のツイート分析をしたもので、生徒や学生(１３～２２歳)の５０万件のデータから読み取っている。その結果、若者の感情は、休校直後の２月末から３月上旬は「楽しい」「うれしい」「不安」が上位を占めた。しかし、先が見えなくなった３月下旬以降は「怖い」「不安」「心配」が増加した。そして、５月になって学校再開の見通しが立ったせいか、「不安」に続いて「楽しい」「うれしい」となった。生徒や学生にとって学校という場が心の居場所になっているのを改めて感じる。

この調査結果を受け、事例研究として学校再開直後の児童生徒の意識調査[2](2019 年 S 小学校 5・6 年生　34・33 人、2020 年 S 小学校 6 年生・K 中学校 1 年生　34・33 人)を実施し

た。この調査は、東京都教職員研修センターで開発した自尊感情についての意識調査であり、筆者の修士論文[3]でも意識調査に活用した。その結果、２０１９年と２０２０年とを比較すると児童生徒の自尊感情の低下が顕著であった。コロナ禍の影響を受け、世界中の情勢が不安定なこの時期に、児童生徒に自尊感情を育み、将来に向けて希望や勇気をもたせることが喫緊の課題であると受け止める。

筆者は大学で道徳教育の講義を受け持っているが、学生のレポート(K 大学・L 大学 3・4 年生)からも興味深い結果を得た。それは、「真の国際人～嘉納治五郎～」[4]という教材を活用して道徳科指導案を作成させたことからわかる。本教材を活用して主題設定をさせたところ、２０１９年と２０２０年では、学生の主題設定項目が大きく変化していたのである。本教材は、文部科学省『中学校　読み物資料集』に掲載されており、国際理解を主題に開発されたものである。２０１９年は、K 大学８７人の学生を受け持ったが、この教材から国際理解を主題とした者は５４人、相互理解を主題とした者が１７人、日本人としての自覚を主題とした者が１３人であった。国際理解を主題とした理由は、「２０２０年の東京オリンピックに向けてとても大切な内容であり、国際理解について考えるのにふさわしいから」「オリンピック招致にかける嘉納治五郎の信念を考えることで、真の国際人とは何かを考えたいから」等が多く出された。２０１９年は対面式の授業を実施しており、筆者が本教材の特質などを講義した後に指導案を作成させたので、主題名は国際理解だと印象付けた傾向があったと思われる。

しかし、２０２０年は、コロナ禍の影響を受けた学生の感情が反映されたのか、また遠隔授業という特殊性もあってか、同じ教材を提示しても学生たちの反応はかなり変化した。前年度同様の筆者作成のパワーポイントを活用した遠隔授業であり解説も細かに行ったが、結果は大きく変容したのである。K 大学・L 大学２００人の学生を受け持ったが、希望と勇気と主題設定した学生が８８人と最も多く、続いて国際理解５０人、相互理解３３人、日本人としての自覚１９人であった。希望と勇気を主題とした理由は、「コロナ禍にあって、不安が大きく、将来に希望がもてない。こんな時代にこそ希望と勇気をもつことが必要だと感じるから」「希望がもちにくい世の中にこそ、生徒に前向きな未来像を描かせることが必要だと感じるから」等が多く見られた。学生たちの言葉から、先が見えず閉塞感のある現在、既存の年間指導計画に固執することなく柔軟に計画を修正していくことで、未来を担う子供たちに希望と勇気を育む道徳科授業をしていく必要性を痛感した。また、時代を反映して、主題名を設定していくことが求められていることも受け止めた。

以上を踏まえ、先行研究から「希望と勇気」についての道徳的価値の分析を行うとともに、学習指導要領解説で自分に自信をもつことと希望と勇気をもつこととの関係性に触れている点を踏まえて「自尊感情」と「希望と勇気」の関わりを捉え、児童生徒の実態や発達の段階に応じた道徳科の指導と評価の在り方について検討し、「希望と勇気を育む道徳科の指導と評価」を提案したいと考え、本主題を設定した。

２　「希望と勇気」についての道徳的価値の研究と分析

道徳科で「希望と勇気」を主題に扱うとき、道徳的価値についての分析及び発達段階に応じた指導の在り方を追求することが求められる。学習指導要領の解説を基盤とするのは勿論であるが、「希望と勇気」の概念を考えるにあたって、アルフレッド・アドラー[5]の共

同体感覚と、ミルトン・メイヤロフ[6]のケアリングを基盤に据えることとした。

アドラー心理学では、勇気とは「困難を克服する活力」とし、「幸せになる勇気をもって、ライフスタイルを選び直しなさい」と教えている。他者の感情に共感し、その上で自分の気持ちを伝えるかかわり方をすることを基本的な姿勢として勇気づけと称している。そして、生きる意味は共同体感覚(自己受容・他者信頼・他者貢献)を得ることとし、あるがままのできない自分を受け入れ、できるように進んでいくことだとしている。折笠国康[7]も「ほめる・叱る」を放棄し、他者を勇気づけるアドラー心理学を生徒指導に生かすことを提唱しており、道徳科の指導でも活用したいと考えた。

メイヤロフは、「勇気があれば希望が生まれ、希望があれば勇気が湧いて出る」と言い、「ケアリングとは相手を育てることであり、自己実現を助けることであると同時に、このケアリングを通じて、ケアする人も共に成長していくものである」と述べている。そして、ケアリングの基本的な要素は、知識、リズムを変えること、忍耐、正直、信頼、謙遜、希望、勇気の８つだとしている。ケアリングでは、他者の多様性を認め、尊重するとともに、他者が抱えている何かしらかの問題を自分の問題として捉えることが大切だとしている。

筆者は、以上のアドラーとメイヤロフの考えは、現在の情勢困難下において「希望と勇気」を育成する道徳科の指導の在り方を探る基盤になるものと受け止める。また、「自尊感情」と「希望と勇気」の関係は、学習指導要領の小学校高学年の「自分自身に自信がもてなかったり、思うように結果が出なかったりして、夢と現実の違いを意識する」時期であることや、中学生の「理想どおりにいかない現実に悩み苦しむ」時期であることとの関わりが深い。コロナ禍の今こそ道徳科の授業を要として、自尊感情を育む実践を積み重ねていくことが必要であると受け止める。逆境に負けない心「レジリエンス」を育てるには、自分を肯定する心「自尊感情」を獲得させることが必要である。そこで本研究では、実践授業での学習活動及び児童生徒の意識調査を活用した道徳科の指導と評価の在り方について検証する。

３　道徳科授業の実践

(1) 「希望と勇気」についての教科書教材の分析

はじめに、小学校高学年の「希望と勇気」を主題とする教科書会社８社の３４教材の傾向を分析した。その結果、内村航平、浅田真央、イチロー、大谷翔平、吉田沙保里などのスポーツ選手を扱った教材が１１と最も多かった。次に、芸術家・研究者などで、ベートーベン、ヘレン・ケラー、正岡子規、山中伸弥などの８教材であった。続いて企業家で、豊田喜一郎、松下幸之助、石橋正二郎、スティーブ・ジョブスの４教材である。

次に、中学校の「希望と勇気」を主題とする教科書会社８社の３６教材の傾向を分析した。その結果、オリンピアンやパラリンピアン、プロ野球選手などのスポーツ選手を扱った教材が１８と最も多く、続いて、実業家・企業家が御木本幸吉、尾高惇忠、松瀬学などの５教材であった。さらに、音楽家などの芸術家を扱った教材が２、医師を取り上げた教材が２であった。

スポーツ選手は、児童生徒の憧れとなる存在であり、その生き方は共感的に受け止められ、自らの希望と勇気に結び付く学びになると受け止める。ただし、スポーツ選手ばかりでは偏りがある。児童生徒の中には、運動が苦手な者もおり、文化や芸術、職人や企業家な

ど様々な分野の人の生き方から学ぶことが肝要である。コロナ禍という困難な現在の情勢下で希望と勇気をなくしかけている児童生徒に、どんなに困難な壁にぶつかっても希望と勇気をもって自らの人生を切り拓いていく生き方のモデルを提示することが求められる。

そこで、本研究では文部科学省発行の「私たちの道徳」[8]及び教科書教材小学校５年で２社[9]、中学校１年で１社[10]掲載されている「ヘレンとともに～アニー・サリバン～」を活用することとした。本教材は、アニー・サリバンが様々な困難を乗り越えながら５０年もヘレンとともに目や耳の不自由な人々の福祉のための活動に取り組むことができた理由を考えることを通して、希望や勇気をもち、困難を乗り越えていくことの大切さについて考えさせていくことができる。

(2) 主題「勇気と希望を育む」に関わる児童生徒の意識調査

東京都教職員センターの研究「自尊感情に関する研究」より児童生徒の意識調査を実施した。この調査は、２０１９年７月に小学校５・６年生で実施しており、その調査結果を踏まえて同じ調査を同一の対象児童生徒に２０２０年６月、小学校６年生と中学校１年生で実施した。調査項目２２それぞれを４段階で自己評価（４‥好きだ、３‥まあ好きだ、２‥あまり好きでない、１‥嫌いだ）させ、本研究の主題「希望と勇気」に関わる４項目に着目して分析した。下表の数字は４段階自己評価の２学級児童生徒の平均値である。

調査項目	２０１９年７月	２０２０年６月
私は自分のことが好きである。	２．７	２．２
自分の中には様々な可能性がある。	２．７	２．０
私には自分のことを理解してくれる人がいる。	３．２	２．４
自分にはよいところがある。	３．０	２．６

アンケート調査とともに、個別の面接を実施したところ、「去年と比べて自信がなくなった。」「大人になった時、自分の可能性を試すことができる世の中になっているのだろうか。」等の不安の声が複数寄せられた。この意識調査の結果から児童生徒の自尊感情が著しく低下していることが見て取れる。コロナ禍の中にあって先行き不透明な状況下では人々の不安が高まりやすい。多くの児童生徒が、スマートフォンやインターネットで誤った情報を得て被害にあうリスクが高くなる。コロナ禍という突然起きた難しい状況の中で、原田恵理子が提言する逆境に負けない強い心「レジリエンス[11]」を育むことが求められていると実感する。自尊感情を回復させ、児童生徒に希望と勇気の気持ちを育むことは喫緊の課題であると受け止める。

(３) 共同体感覚とケアリングの視点を踏まえた指導と評価の工夫

自尊感情についての意識調査及び実践授業は、江戸川区立Ｓ小学校６年児童と江戸川区立Ｋ中学校１年生の各１学級で、２０２０年６月に実施した。

実践授業をするにあたっては、中心発問において、共同体感覚(自己受容・他者信頼・他者貢献)に関わる児童生徒の発言や記述を授業観察の視点に組み入れ、児童生徒が自分自身を受け入れ、他の人を信じ、貢献していこうとする心情を養う授業構成を考えた。

また、展開後段では、他者の多様性を認め尊重し、他者が抱えている何かしらの問題を

自分の問題として捉えるケアリングの考え方を取り入れるように工夫した。

評価については、経年の自尊感情についての意識調査を比較分析した上で個人面接を行い、児童生徒一人一人を認め、励ます個人内評価を行うこととした。

(4) 主題名「希望と勇気」についての授業実践

① ねらい

ヘレン・ケラーを支援したアニー・サリバンの生き方を通して、困難に直面しても希望と勇気をもって、粘り強く努力しようとする態度を育てる。

② 学習指導過程

段階	学習活動 ○主な発問◎中心発問 ・児童生徒の反応	☆指導上の留意点 ※資料・準備物 ◇評価
導入	1 これまでに「やり遂げた」経験を振り返る。 ○今までにやり遂げてよかったという体験にはどんなものがありますか。 ・マラソン大会で完走した……１１人 ・毎日読書をして読み終えた……１２人 ・野菜栽培で収穫までできた……１０人	☆ねらいとする道徳的価値「希望と勇気」についての体験を想起させる。
展	2 教材「ヘレンとともに」を読んで、話し合う。 ○アニーは心の壁に跳ね返されそうになった時、どんなことを考えたか。【共同体感覚(自己受容・他者信頼)】 ・ヘレンのような子を自分が教えることができるのか不安になった。 ・周りの陰口が聞こえてきたとき、やめてしまいたいと思った。 ・毎日学校に通い続けることは大変なことだ。休みたいときもあっただろう。 ・再び失明しそうになった時、活動を続けられるか悩んだだろう。	※教師が範読する。 ☆アニーにとっての希望とは何か、勇気とは何か、キーワードに着目して共感的に考えさせる。 ☆共同体感覚(自己受容、他者信頼)の段階の感情に共感する。
開	◎アニーが、いくつもの心の壁を打ち破ることができたのはなぜか。【共同体感覚(他者貢献)】 ・お世話になった人や校長先生への恩返しがしたかったから。 ・ヘレンが心配だったから、ヘレンが大切な存在だから。	☆ヘレンを支えるアニーのケアリングの心に寄り添って、我がこととして受け止めて考えさせる。 ☆中心発問において共同体感覚(他者貢献)の段階を理解する。 ☆ロールプレイングを通して、ヘレンやアニーの立場になって考えさせる。

	・ヘレンが「ＷＡＴＥＲ」の存在に気付いた時、とてもうれしかったから。うれしいこともたくさんあったから。 ・自分はできる限りの努力をしてきたから、きっとできると信じてきたから。 ・途中であきらめたら、それまでの努力が無駄になるから。 ・諦めたらそこで終わりだから、目標に向かって勇気を持つ。 ・ヘレンの家庭教師になることは自分が決めた目標だから。 ・目や耳が不自由な人たちを救うことは自分の夢だから。 ・ヘレンの夢は自分の夢でもあるから。	ペアになって、両者の立場になり切って考えさせることを通して、他者貢献の大切さを理解させる。 ※ワークシート ◇夢や目標に向かって、困難を乗り越えようと粘り強く努力することの大切さについての考えを深めているか。
	３　夢や目標に向かって、心の壁を乗り越え、粘り強く努力を続けた経験について語り合う。 ○　夢や目標に向かって、心の壁を乗り越え、努力を続けたことや、努力を続けていることはありますか。 ・看護師になりたいという夢に向かって、勉強や体力づくりに頑張っている。 ・プロゴルファーになることを目指して、毎朝ランニングやパターなどの練習を続けている。 ・野球の都大会出場を目指していたのに試合が中止になって目標を失ったが、今の状況でできることを続けていれば試合への希望につながると信じている。	◇自分自身を振り返ったり、自分の経験と照らし合わせながら友達の経験を聞いたりすることで、自分との関わりでねらいとする価値を捉えることができるようにする。
終末	４　教師の説話を聞く。 ○本時を振り返り、振り返りシートに記述する。	☆教師自身の現状下における希望や勇気について語る。 ※振り返りシート ◇希望や勇気をもって、困難を乗り越えようと粘り強く努力しようとする気持ちを高めたか。

評価の観点としては、次の３点を挙げた。

○発問や中心発問において、「希望と勇気」を支える共同体感覚(自己受容・他者信頼・他者貢献)を認識した発言が聞かれたか。

○展開後段で、ケアリング視点を考慮し、他者の多様性を認め尊重し、他者が抱えている何かしらの問題を自分の問題として捉えることができたか。
○ロールプレイを通して、希望や勇気の気持ちを、自分の生活にどう生かしていくか、考えを深めることができたか。

授業観察の視点は次の 2 点を挙げた。
○「希望や勇気」を支える共同体感覚(自己受容・他者信頼・他者貢献)のキーワードを、児童の発言や記述から捉えることができたか。
○展開における発問の構成は、ねらいとする価値へ迫るために適切であったか。

③　展開段階の主な発問についての授業記録(小学 6 年 1 学級の抜粋)
○アニーは心の壁に跳ね返されそうになった時、どんなことを考えたと思いますか。
・ヘレン・ケラーのように障害のある子の教育はとても大変であり、自分なんかが教えられるのか自信がなかったと思う。
・サリバンの教え方は厳しすぎるなどの陰口が聞こえてきたとき、もうヘレンを教えるのを投げ出してしまいたいと思った。
・遅々として進まないヘレンの状況の中で、毎日学校に通い続けたのは大変だったと思う。自分ならとっくにやめていたと思う。
・自分自身が再び失明しそうになった時、ヘレンを教え続けることなど難しいと活動を続けられるか悩んだと思う。私なら自分の目のことで精いっぱいで、ヘレンのことなど教えることができないと思う。
◎アニーが、いくつもの心の壁を打ち破ることができたのはなぜだろうか。
・ヘレンがアニーの手に「ＷＡＴＥＲ」と何度も書いた時、とてもうれしくて感動し、それまでの苦労が吹き飛んでしまったから。(他者信頼)(レジリエンス)(ケアリング)
・自分が校長先生はじめ多くの人の支えで今があることを受け止め、ヘレンを教えることを通して恩返しがしたいと思ったのだと感じる。(他者貢献)
・目と耳と口の３つが不自由なヘレンが心配であり、目が不自由であった自分と重ね合わせており、ヘレンがとても大切な存在に感じていたから。ヘレンの境遇を理解できる自分にこそ、ヘレンの家庭教師ができると感じていた。(自己受容・他者貢献)(ケアリング)
・自分ができる限りの努力をし続けることで、ヘレンはきっとできるようになると信じていたから。(他者信頼・他者貢献)(ケアリング)
・ヘレンを教えることを途中で投げ出してしまったら、これまでの努力が無駄になってしまうから。ヘレンのために家庭教師を続けることが大切だと思った。(他者貢献)(レジリエンス)
・ヘレンを教えることを諦めたらそこで終わりだから、自分の目標に向かって希望と勇気をもつことが大切だから。(自己受容)(レジリエンス)
・ヘレンの家庭教師になることは自分が決めた目標であり希望であったから。(他者貢献)
・目や耳が不自由な人たちを救うことは自分の夢だから。(他者貢献)

授業実践の抜粋記録から児童生徒の発言・記録を共同体感覚の自己受容・他者信頼・他

者貢献に分類してまとめると、初発の発問では自己受容や他者信頼ができない発言が多く出されていた。しかし、中心発問になるとケアリングの視点が芽生え、自己受容・他者理解・他者貢献の発言が多く出されるようになった。また、どんなに困難な状況にあっても屈しないレジリエンスの発言が出されるようになった。これらの発言や記述から、「希望と勇気」の道徳的価値についての理解が深まったと受け止める。

④　実践授業の成果と課題

実践授業の成果と課題についてまとめるにあたって、３月から６月の休校期間があったことも大きく影響して、小学６年生と中学１年生の道徳的価値「希望と勇気」に関わる発達段階の差異がほとんど見られなかったため校種毎に成果と課題を分けないこととした。

まず成果は、次の４点である。

〇適時性のある教材を活用することで、道徳的価値についての自我関与が高まった…読書科で既習のヘレン・ケラーの伝記をアニー・サリバンの視点から道徳的価値「希望と勇気」について考えさせる学習活動にロールプレイを取り入れて自我関与させることで、ねらいとする価値についての理解が深まり、生き方についてのかかわりを意識できるようになった。

〇児童生徒の発言やワークシートへの記述のキーワードを焦点化し、価値理解を深めた…初発の発問では他者の多様性を認め尊重するというケアリングの視点を土台に価値理解をさせた。さらに中心発問ではワークシートに自分の考えを記述し、ロールプレイをさせ、共同体感覚(自己受容、他者信頼、他者貢献)に分析することで多面的・多角的に児童生徒の考えを広めることができた。

〇生き方とのかかわりを捉えて考えることができた…終末で振り返りシートに記述することで、自らの生き方と関わらせて考えさせることができた。特に、「今日の授業で、「これから～していきたい」という気持ちをふくらませることができた」の自己評価を重視し、ねらいとする価値への実践意欲の高まりを把握することができた。

〇前年度と今年度に同じアンケート調査をすることで、児童生徒の変容を把握した授業展開ができた…「私は自分のことが好きである」「自分の中には様々な可能性がある」「私には自分のことを理解してくれる人がいる」「自分にはよいところがある」という自尊感情に着目した授業構成をすることで、厳しい状況下においても希望と勇気を持つことの大切さに気付かせるように努めた。筆者の修士論文でも、自尊感情と道徳的価値についての相関関係に着目したが、本論文でもこの調査を生かすことができた。さらに、授業観察で注目していた４人の抽出児童生徒を分析した。前年度から自尊感情が著しく低下したＮ児に授業後に面接をしたところ、「どんなに嫌なことがあってもあきらめてはいけないと思った。みんなの考えを聞いて、自分の考えが狭かったと気づいた。希望をもって生きることは大切だと思った」と答えた。同じく前年度から自尊感情が著しく低下したＵ児に授業後に面接をすると、「今の状況で希望をもてと言われてもまだ難しいと感じるが、現状の中でできることは前向きにやっていかなければと思う」と答えた。さらに、自尊感情が一貫して高かったＴ児とＹ児においても面接では今の状況をとてもつらく感じており、意欲をもって前向きな考えを発言するまでにはなっていないことを実感した。この面接結果を今

後の道徳科において意図的指名やロールプレイの指名に生かしていくことが効果的であると考える。

課題としては、次の１点である。
〇年間指導計画を柔軟に変更することが求められる…緊急事態宣言によって３か月間休校になったことで道徳科の年間指導計画の変更を余儀なくされた。自校の学校や児童生徒の実態を踏まえ、何を重点項目にするか、年間計画をどのように再構成するのかをしっかりと共通理解することが大切になった。各区市町村の教育委員会から年間指導計画の修正の指示が出され、各校では教務主任・道徳教育推進教師が中心となって対応に苦慮したことと拝察する。しかし、大切なことは眼前の児童生徒にとっていま求められる育成すべき道徳的価値は何かであり、優先順位を決めて変更していくことが必要である。今後も、コロナ禍の第２波が起こることを想定し、年間指導計画の再調整を求められる事態が起こり得ることを視野に入れ、先を見通した実践を積み上げていくことが肝要である。

４　研究の成果と課題
本研究では、「希望と勇気を育む道徳科の指導と評価について」を主題に、児童生徒の自尊感情に関わる経年の意識調査を活用した道徳科の指導法を展開しながら、児童生徒の実態に応じた評価法を工夫し、「希望と勇気」を支える共同体感覚(自己受容・他者信頼・他者貢献)と他者の多様性を認め尊重するというケアリングの視点に着目しながら授業検証を行った。
研究の成果は次の２点である。
① 「希望と勇気」についての道徳的価値理解の深まり…これまで、学習指導要領解説書のみの道徳的価値分析であった研究実践が、「希望と勇気」についての道徳的価値についての先行研究を分析し、活用することで、共同体感覚(自己受容、他者信頼、他者貢献)や他者の多様性を認め尊重するというケアリングについての概念を生かした授業実践となった。
② 児童生徒の意識調査を活用した指導と評価…授業者がしっかりとねらいとする道徳的価値についての評価基準をもち、児童生徒の自尊感情に関わる経年の意識調査を活用し、個別の面接を実施したことで、認め、励ます個人内評価をすることができた。
課題は、次の２点である。
① 内容項目に特化した指導法の開発…本研究では、「希望と勇気」を主題とした道徳科の指導法として、児童生徒の自尊感情に関わる経年の意識調査を活用し、「ヘレンとともに～アニー・サリバン～」を教材に、児童生徒の発言や記述をケアリングの視点を土台に、共同体感覚(自己受容、他者信頼、他者貢献)に分析して授業展開を行った。他の内容項目においても、それぞれの道徳的価値に特化した効果的な指導法があるのかを探求したい。
② 測定資料を活用した認め、励ます個人内評価の開発…評価については、客観的な見取りを念頭において、自尊感情に関わる経年の意識調査を活用して個別の面接調査を行った。新学習指導要領では、道徳科の評価は数値によらず観点別評価もしないと明記されているが、道徳科の目標が児童生徒の道徳性の育成にある以上、授業者は学習者の道徳性の発達段階を把握する必要がある。とりわけ客観的資料としての意識調査などの測定資料を指導

に活用していくことが、児童生徒の道徳性を育むことにつながると考える。そこで、他の内容項目の指導においても様々な診断テストを活用したり、道徳科の授業でのアンケート調査を活用したりして、児童生徒の道徳性を客観的に測定していくことが求められると考える。

今後も、様々な手法を創意工夫し、児童生徒の道徳性を育む指導と評価の在り方について検討を進めていく考えである。

５　まとめ

児童生徒に「希望と勇気を育む」ためには、まずは指導者である教師自身が「困難に負けない勇気」と「逆境に負けないレジリエンス」をもつことである。その上で、道徳授業者として、明確な「希望と勇気」についての道徳的価値理解の基に、眼前の児童生徒の実態に即した指導構想を立て、実践を積み上げていくことが求められる。

本研究では、「希望と勇気」を支える共同体感覚やケアリングの視点に着目して指導したが、「希望と勇気」の学習の基底には「人間として生きることの意味」や「社会的な存在としての役割」など、人間関係についての基本的な精神を重視していくことも必要だと考える。

今後も、人格の完成を目指す学校教育の中核を果たすのが道徳教育であることを肝に銘じ、先の見えない不透明な時代を生き抜く児童生徒に「希望と勇気を育む道徳科の指導と評価」の実践を積み重ねていきたい。

参考文献

[1] 読売新聞記事「学生　揺れた３か月」(読売新聞社とＮＴＴデータの情報解析サービスの調査によるツイート分析　２０２０．６．１)

[2] 自尊感情測定尺度(東京都版)「自己評価シート」(東京都教職員研修センター紀要　第１１号、２０１１年)を活用して、授業実践対象の児童生徒に調査実施。

[3] 坂口幸恵『児童生徒の道徳性の発達を促す指導と評価の在り方について～認め,励ます個人内評価を通じて～』(麗澤大学大学院修士論文、２０２０年)、p110-114,p145-149。

[4] 文部科学省『中学校道徳　読み物資料集』(廣済堂あかつき、２０１２年)、p70-75。

[5] アルフレッド・アドラー　著・岸見一郎・古賀史健　訳『嫌われる勇気』(ダイヤモンド社、２０１３年)、p110-111、p178-181、p242-243。

[6] ミルトン・メイヤロフ　著・田村真・向野宜之　訳『ケの本質』(ゆみる出版、１９８７年)、p60-65, P206-209。

[7] 折笠国康「アドラー心理学の実践への導入」(『指導と評価』図書文化、２０２０年５月)、p34-36。

[8] 文部科学省『私たちの道徳　小学校５・６年』(廣済堂あかつき、２０１４年)p22-25。

[9] 小学校教科書(廣済堂あかつき『小学生の道徳　５』、日本文教出版『生きる力　５』、２０１９年) p126-129,P98-101。

[10] 中学校教科書(光村図書『きみが　いちばん　ひかるとき１』、２０１８年)p27-31。

[11] 原田恵理子「逆境に負けない強い心『レジリエンス』を育む」(『指導と評価』図書文化、２０２０年６月)、p60-61。

実践研究論文

Evaluating How the Teaching of Moral Studies Can Nurture Hope and Courage
～A Case Study Utilizing a Survey of Children and Student Attitudes～

SAKAGUCHI Yukie

Keywords： Hope and courage, sense of community（self-importance, trust in others, the contribution of others, caring, resilience

【Abstract】

The corona disaster has had an unprecedented impact on people around the world. With schools abruptly closed for as long as three months, there is an urgent need to build the resilience our students need to withstand such adversity, and to foster courage and hope for the future in them.

So now is an especially important time to study and evaluate the teaching of moral studies in terms of fostering hope and courage. Using “With Helen: Annie Sullivan” as teaching material in the moral education system, a questionnaire was developed to survey students’ self-esteem, and a class created that incorporated a sense of community and a caring perspective. The method of evaluation involved analyzing student statements and descriptions, interviewing each student individually, and conducting an individual evaluation that acknowledged and encouraged them individually.

In the current era of uncertainty, it is vital that the teaching of moral studies aims to help students develop resilience and the ability to live robustly with courage and hope for the future.